

博物館 Dictionary No.245

～あなたに語る・時代を超えて生きる心～

てんじ 展示中の作品について、研究員がわかりやすく解説します。 かいせつ

こふんじだい ばぐ 古墳時代の馬と馬具

日本に馬がくるまで

みなさんは、人がどこで、いつから馬を飼いはじめたのか知っていますか。最初に馬を飼っていた人々は、今から約5000～6000年前、日本のはるか西にある中央アジア・カザフスタンの草原地帯にいたと考えられています。そこでは、銜^{はみ}と呼ばれる馬具^{ばぐ}が発見されています。銜とは、馬の口にかませて手綱^{たづな}を通じて人の拳の動きを伝え、馬を操るための道具です(図1)。車でたとえるなら、ハンドルやブレーキの役割を果たすものです。動きの速い馬をうまく操り^{あやつ}、飼いならすためには、このような道具が欠かせません。つまり、銜^{はみ}の発明こそが、人類の「馬を飼う歴史」の始まりだったのです。

こうして生まれた馬を飼う技術は、やがて東アジア一帯に広まりました。しかし、周りを海に囲まれた日本にこの技術が伝わったのは、今から1500年前、古墳時代中期(5世紀)のことです。当時、中国や朝鮮半島^{ちょうせんはんとう}では戦いが絶えず起こっており、人々は勝利を求めて、馬の速さと力を武器として使うようになりました。日本の人々もこのような様子を見て、「自分たちも馬がほしい」と考えました。そこで当時の日本の王(倭王)^{わおう}は、朝鮮半島^{ちょうせんはんとう}から馬や馬の飼育に詳しい人々を招き入れたのです。近畿^{きんき}には、王が招いた人々を住ませ、馬を飼育していた牧場がありました。大阪府四条畷市にある部屋北遺跡^{べつやきたいせき}がそのひとつです。この遺跡からは、馬のお墓や、子馬のトレーニングに使われた馬具、馬が塩分を補給^{きゅう}するための塩を入れた土のうつわなどがみつかっています。

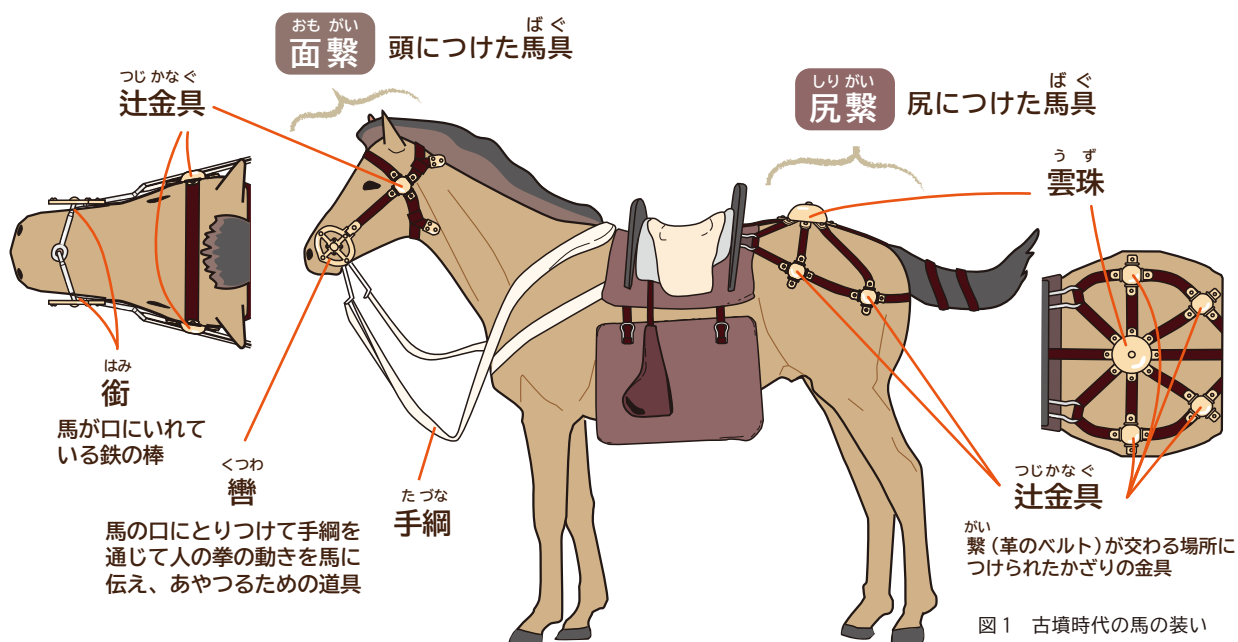


図1 古墳時代の馬の装い

力のしるしとしての馬具

古墳時代の偉い人たちは、自分の力を示すために、大きなお墓(古墳)をつくりました。そこには豪華な品々をおさめましたが、馬具もそのひとつとしてよく入れられました。当時、馬を飼うことができるのは限られた少しの人だけでした。だからこそ、馬や馬具を持つことは、その人が偉い立場にあるというしるしにもなったのです。京都府福知山市の弁財1号墳というお墓から見つかった馬具もその例です。このお墓には、轡・雲珠・辻金具といった馬具がおさめられています(図2)。どれも金色に輝いていますね。これは「こんなに立派な馬具を持っているぞ」とまわりにアピールするため、わざとはなやかに作られたのです。

しかし、実際にはすべて金で作られていたわけではありません。鉄の板に、金メッキした銅の板を貼り合わせて作られていました。このような作り方を「鉄地金銅張」といいます。すべてを金で作るのではなく、鉄や銅を組み合わせることで、当時まだ貴重だった金属を節約していたのです。古代の人々の知恵が感じられますね。

ところが古墳時代から飛鳥時代へと時代がうつると、仏教が広まったことにより、偉い人たちは、古墳にかわって寺院づくりなどに力を入れるようになりました。それにとともに、自分の力を見せつけるために、お墓に豪華な品物を入れることが少なくなりました。そのため、きれいに飾られた馬具もやがて作られなくなっていったのです。

かがみいたつきくつわ
鏡板付轡



うず
雲珠



つじかなぐ
辻金具



図2 京都府福知山市弁財1号墳から出土した馬具 古墳時代後期(6～7世紀) 京都国立博物館蔵

(考古室 繚納民之の
そうのうたみの)